

Cycle は再来（さいくる）か？

景気循環論というのがあり、キチン（在庫投資；40ヶ月）、ジューグラー（設備投資；8～10年）、クズネッツ（住宅・建設投資；20年）、コンドラチェフ（技術革新；40～60年）等がよく知られている。株式市場の分析で良く使われるテクニカル分析というのも実は、循環論の一種なのである。過去にこのようなパターン（それは罫線の型であったり高安のリズムであったりする）があったから、今回もこのパターンが来るものとして予測を立てる。

確かに、「sun rises sun sets」「日の下に新しいものはない」と「伝道の書」も伝えている。しかし、と私は思わずにいられない。10年前の私と今の私とは違い、10年前のあの人と今のあの人は異なってしまっている。まして、世界が複雑化し、global化するなかで、変化に対して影響を与えるファクターの数は増し、その緊密度も増してしまった。現代はその変化が「断絶」と呼ぶうるほどに乖離し、また頻出するようになった時代だ。

世論調査によると、安倍晋三氏が率いる自民党が過半数を取る勢いようだ。日銀による大量の買オペと、20兆円規模の財政投融资の10年継続をハイテンションに訴え(彼はもしかすると躁期なのかもしれない)それを奇貨とした外国人の仕掛けにより株式市場は東の間の上昇に転じている。この二つの景気刺激策。つまり①日銀による超金融緩和策と②建設と命名された赤字国債発行により財投を推し進める景気刺激策の両者ともまだ足りないという意見のようだ。しかし、私はこの二つとも既に十分に実施されたと考え、それにも拘わらずこの失われた20年は現出しており、なお終焉を迎えそうにないと考えるもの一人だ。因みに、冒頭に例示した景気循環論者達は日本のこの失われた20年をどのように分析し、名付けるのであろうか？

私はこれら二つの景気刺激策が機能するのは、経済が循環的不況にあるときなのではないのかと疑っている。今の景気悪化とデフレは正に循環的景気悪化ではなく、もっと根本的な構造的なものなのではないかと思っているのである。構造的なものであるから、従来型の景気刺激策は全く効かなかったしこれからも効かないであろうと考えるのだ

構造変化とは先ず①生産年齢(15歳～64歳)人口の減少による需要の絶対的不足である。②日本は最も早く成熟化したため人々に物が行き渡ってしまっている。欲しいものが最早ないのである。③自動車にしる電機機器にしるメーカーの数が多く、しかも技術力が高すぎ、市場を世界に向けても、今や供給過剰なのである。④世界の供給力を吸収してきた米国と欧州がリーマンショックで全く力を失ってしまった。

従ってこれら二つの方策では、この「需給ギャップ」を埋められない。

今や、公的資本形成(いわゆる財投)ではなく、民間設備投資でもなく、まして純輸出などではない、GDPの大宗を占める「民間消費」の需要の拡大こそがどうしたら謀れるのかを、一度地に落ちてでも、真剣に考えるべき刻(とき)なのだ。

2012年12月11日記 千葉の県人 鎌田 留吉

